



Title	フリジア語とフリジア人について
Author(s)	清水, 誠
Citation	独語独文学研究年報, 31, 82-98
Issue Date	2004-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/26160
Type	bulletin (article)
File Information	31_P82-98.pdf



[Instructions for use](#)

フリジア語とフリジア人について

清水 誠

1. 四つの「フリースラント」と三つの「フリジア語」

ゲルマン諸語の中でフリジア語の認知度は極端に低い。フリジア人の存在が与える印象もきわめて薄い。この事情はゲルマン語圏でも同様である。日本で出版されている教養書や専門書の紹介に誤りが目立つのは、ドイツ語や英語で書かれた類書の誤記の踏襲によることも少なくない。これはフリジア語が国をもたない少数言語であることのほかに、オランダと北ドイツに残る四つの「フリースラント」という地名と三つの「フリジア語」という言語名の対応が複雑であることにも関係がある。今日、フリジア人を特徴づけるものは、統一的標準語を欠くフリジア語(群)という無形の精神文化に結晶しており、フリジア人を語るときには言語的側面を第一に重視しなければならない。本稿では「フリジア語」と「フリースラント」の歴史の変遷をたどり、今日の言語事情を解説することによって、正確な理解を与えたい。なお、紙面の制約で図表は割愛したので、清水(2000)を参照されたい。

2. フリジア人の起源と北海ゲルマン語

ローマ時代の著述家—大プリニウス(Plinius)やタキトゥス(Tacitus)—がライン川(ド. Rhein/オ. Rijn)とエムス川(ド/オ. Ems)河口の間に居住する部族として言及している *Frisii*, *Frisia(e)vones* がはたしてゲルマン人だったかについては、異論がある。この地は当時、ゲルマン人の居住地ではなく、*p-*で始まる固有名詞はゲルマン語とは認めがたい。なぜなら、古典的な「子音推移」(ド. *Lautverschiebung*, 「グリムの法則」)の解釈に従えば、印欧祖語では語頭に **b-* は原則として現れず、ゲルマン語で **p-* に推移した音で始まる語は、本来のゲルマン語の語彙ではあり得ないからである。地名にもゲルマン語ともケルト語とも理解しがたいものが散見され、*Frisii* というラテン語名自体、ゲルマン語としては解釈できないとする意見もある。当時のフリジア人がゲルマン人ともケルト人とも別の民族だったという可能性は、安易には排除しがたい。

いずれにせよ、6世紀にはイギリス南部と大陸北海沿岸部に「北海ゲルマン語」(ド. *Nordseegermanisch*/エ. *North Sea Germanic*) と呼ばれる言語グループが形成されていたと考えられ、非ゲルマン人説をとったとしても、この時期までにフリジア人がゲルマン人の言語・文化に同化されていた事実は疑いない。北海ゲルマン語は5世紀半ばのアングロ

サクソン人のブリテン島への移住に先立って、大陸部の地理的近接性による相互接触を通じてその特徴が形成されていたとも言われるが、これは単独の言語ではなく、いわゆる「西ゲルマン語」(ド. *Westgermanisch*/エ. *West Germanic*) の下位区分をなす諸言語の総称である。その構成員は「古フリジア語」(ド. *Altfriesisch* /エ. *Old Frisian*)、「古英語」(エ. *Old English*)、それに、北ドイツとオランダ北東部にまたがる海岸部の「古ザクセン語」(「古サクソン語」以下略、ド. *Altsächsisch*/エ. *Old Saxon*)—今日の海岸部の低地ドイツ語(ド. *Niederdeutsch*)とエイセル川(オ. *IJssel*)以北のオランダ語低地ザクセン方言(サクソン方言、以下略、オ. *Nedersaksisch*)の前身—であり、ある種の音韻の共通性(ド. *Ingwäonismen*)を特徴とする。その共通性は古フリジア語と古英語の間で著しい。古ザクセン語が早期にフランケン語(フランク語、以下略)化され、古英語がその性格を大きく変化させた中で、フリジア語はオランダ語、ドイツ語、デンマーク語の影響を受けつつも、北海ゲルマン語の唯一の後裔として現在に至っている。

中世の古フリジア語(1275~1550)による文献はほぼ法律文書と公文書(ド. *Urkunde*)に限られる。古フリジア語は古東フリジア語(ド. *Altostfriesisch*)と古西フリジア語(ド. *Altwestfriesisch*)に区分されるが、これは1450年頃を境として前者がそれ以前、後者がそれ以後を指すように、年代的性格が強く、古典期古フリジア語(ド. *klassisches Altfriesisch*)と公文書を中心とする後期古フリジア語(ド. *postklassisches Altfriesisch*)と呼ぶほうが適切である。この時期の文献は以下に述べる西フリジア語の前身によるもので、北フリジア語は低地ドイツ語に文章語としての役割を奪われており、文献的に残っていない。「古フリジア語」の「古」(=古期、ド. *Alt*/エ. *Old*)とは、ヨーロッパ史の区分とは無関係に、当該言語内の相対的時代区分を指すが、フリジア語の場合は他のゲルマン語と比較してかなり遅く、ドイツ語や英語では「中期」(ド. *Mittel*/エ. *Middle*)の時代に相当し、それは言語的特徴にも現われている。

3. 中世の西・中部・東フリースラント

伝説によれば、オランダの首都アムステルダム(オ. *Amsterdam*)の起源は、旧市街の中心を北に流れるアムステル川(オ. *Amstel*)の岸辺に犬を連れた二人のフリジア人の漁師が降り立ったこと求められるという。じじつ、中世初期のフリジア人居住地域は今日とは比較にならないほど広く、7世紀にはオランダのホラント地方(オ. *Holland*)とユトレヒト州(オ. *Utrecht*)の大部分を含み、俗に「ライン川からヴェーザー川(ド. *Weser*)まで」とされていた。この二大河川には含まれた「大フリジア」(ラ. *Frisia Magna*)の領域は、8世紀中に徐々にフランケン人(フランク人、以下略)の王国(フランク王国、ド. *Frankenreich*)に統合されていき、843年のヴェルダン条約に続く王国分割を経て、925年には最終的に東フランケン人の王国(東フランク王国、ド. *Ostfranken*, „Deutsches

Reich“)に編入された。10世紀前半には、フリースラントの指す領域は今日のオランダ、北ホラント州（オ. Provincie Noord-Holland）の北西部からヴェーザー川の西側のヤーデ湾（ド. Jadebusen）までに限定して理解されていた。この時期のフリジア人居住地域は次の三つに大別される。

(A) 西フリースラント（オ. Westfriesland）

今日のエイセル湖（オ. IJsselmeer）以西のオランダ、北ホラント州北西部で、アルクマール（オ. Alkmaar）、ホールン（オ. Hoorn）、エンクハイゼン（オ. Enkhuizen）などの都市を含む地域。今日でも慣習的に西フリースラントと呼ばれる。

(B) 中部フリースラント（オ. Middelfriesland/ド. Mittelfriesland）

エイセル湖以東、オランダとドイツの国境付近を流れるエムス川まで。今日、ラウエルス川（オ/西フ. Lauwers, およびラウエルス湖（オ. Lauwersmeer/西フ. Lauwersmar））以西の「フリースラント州」（オ. Provincie Friesland/西フ. Provinsje Fryslân）とそれ以東の「フローニンゲン州」（オ. Provincie Groningen）から成る。

(C) 東フリースラント（ド. Ostfriesland）

北ドイツのエムス川以東、ヤーデ湾までのエムデン（ド. Emden）、レーア（ド. Leer）、アウリヒ（ド. Aurich）などの都市を含む地域。今日の通称も東フリースラント。

中世における三者の地理的隔たりは現在とは大きく異なり、(B) の中部フリースラントと (C) の東フリースラントの境界をなすエムス川河口のドラルト湾（ド. Dollart/オ. Dollard）は、当時、内陸部に深く入り込んでいた。ラウエルス川（および湖）も中部フリースラントを二分する海の一部だった。また、大堤防（オ. Afsluitdijk）の建設で淡水化したエイセル湖は、かつてはザイデル海（オ. Zuiderzee）と呼ばれ、12世紀から13世紀にたび重なる北海からの津波の襲来によって、かつてのフレーヴォ湖（オ. Flevo）とヴリー川（オ. Vlie）が大きく拡充される形で成立したものである。

4. 西フリースラントとオランダ語西フリースラント方言（オ. Westfries）

1292年にホラント伯領に併合された (A) の西フリースラントに特有の今日の言葉は、「オランダ語西フリースラント方言」（オ. Westfries）であり、フリジア語ではない。これは古低地フランケン語（オ. Oudnederfrankisch）に連なるオランダ語ホラント方言（オ. Hollands）に属する。住民にもフリジア人という意識はほとんどなく、文化的にもフリジア人を特徴づけるものは希薄である。「西フリースラント」は歴史的俗称にすぎず、(B) のフリースラント州の意味で用いる例も散見される。

5. 中部フリースラントと西フリジア語 (西フ. *Westerlauwersk Frysk*)

中部フリースラントの東半分をなすラウエルス川以東の地域も、中世後期までにオランダ語低地ザクセン方言に属する「オランダ語フローニンゲン方言」(オ. *Gronings*) に移行した。経済的・政治的中心となった州都フローニンゲンは、元来、例外的に中部フリースラントに属しておらず、15世紀以降、この地域の非フリジア語化が加速されることになった。同方言は基層(エ. *stratum*)としてのフリジア語的特徴を除けば、明確にフリジア語ではなく、住民もフリジア人とは一線を画すという意識を強く自負している。

ラウエルス川の境界は伝統的に強固で、802年にフランク王国のカール大帝(ド. *Karl der Große*/フ. *Charlemagne*) がラテン語に訳させたフリジア人の慣習法 *Lex Frisionum* の適用領域においても、(B) と (C) を分けるエムス川ではなく、ラウエルス川(および湖、当時は海)の境界が第一に重視されていた。教会組織の上でも、1000年頃のキリスト教の普及以降、(A) の西フリースラントと (B) のラウエルス川以西の中部フリースラントはユトレヒト司教区、同川以東の中部フリースラントは(フローニンゲン市を除いて) ミュンスター(ド. *Münster*) 司教区に分かれた。

そして、今日、(A) から (C) の地域に残存する唯一のフリジア語も、(B) のフリースラント州(約3,234km²、約62万人)の大部分とフローニンゲン州の西側の一部(オ. *Westerkwartier*) で用いられる「ラウエルス川以西のフリジア語」(西フ. *Westerlauwersk Frysk*/オ. *Westerlauwers Fries*)、つまり「西フリジア語」をおいてほかにない(便宜的に ド. *Westfriesisch*/エ. *West Frisian* と呼ぶことがあり、4. の オ. *Westfries* との区別に注意)。この地のフリジア語は、1498年にフリジア人が最終的に独立を失い、「ユトレヒト同盟」(オ. *Unie van Utrecht*) に編入された翌年の1580年に文章語としての地位をオランダ語に奪われた後も、永らえ続けたのである。フリジア人の東方拡大はラウエルス川を起点として起こり、その後の後退もこの地でとどまったと言える。

西フリジア語は後述する東・北フリジア語に比べて桁はずれに話者が多く、約35~40万人を数え、一般にフリジア語の代名詞と理解されている。話者数の正確な特定は困難だが、1979~82年のフリスケ・アカデミー(*Fryske Akademy*)のアンケート調査では、フリースラント州全住民約60万人の西フリジア語の能力は「聞き取る 94%」「話す 73%」「読む 65%」「書く 10%」であり、最も話すのが容易(つまり、第1言語)と答えたのは67%だった(Gorter et al. 1984 : 81, 128)。このことから、話者数は約40万人とされる(Gorter 1997 : 1154)。また、上述のように、東側に接するフローニンゲン州の西部(西フ. *Westerkertier*/オ. *Westerkwartier*)にも西フリジア語の一角があり(Gorter/Jelsma/Jansma 1990)、それ以外にも話者はいる(Jansma/Jelsma 1996)。ただし、この統計は話者の申告によるために、Feitsma/Jappe Alberts/Sjölin (1987 : 29), Wilts/Fort (1996 : 2), Jansma (2000 : 170) のように低く見積もって、35万人とする意見も強い。

州都リャウエト(西フ. Ljouwert)/レーヴァルデン(オ. Leeuwarden, 約88,000人)をはじめとする11の歴史的「都市」(西フ. stêd)の七つでは、各々に特有の「都市フリジア語」(西フ. Stedsk/Stedfrysk)と呼ばれるオランダ語との混成言語が発達している。したがって、生粋の西フリジア語に触れるためには、田舎の小村を訪ねなければならない。しかも、西フリジア語話者はオランダ語との社会的役割分担を意識した二言語使用者なので、外部からの来客は路上での世間話に遠巻きに耳を傾ける必要がある。

言語と結びついた強い独立心を特徴とする伝統的な民族意識は強固で、一般に西フリジア語の話者はオランダ人であることよりも、第一にフリジア人であると意識している。西フリジア語は司法・行政面で一定の社会的効力を持つオランダの地域的公用語であり、オランダ語との相違を強く意識した標準語としての言語規範がフリジア語の中で唯一、確立している。ただし、上述のように、フリースラント州全住民の西フリジア語を書く能力は10%にすぎず、話者の大半が母語にたいして「文盲」(ド. Analphabeten)であるとの不名誉なそしりも免れない。

6. 東フリースラントとドイツ語東フリースラント方言(ド. Ostfriesisch)

(A)の西フリースラントの言葉が西フリジア語ではないのと同様に、(C)の東フリースラントで用いられているのも東フリジア語ではない。この地のフリジア人は1464年にツイルクセナ(ド. Cirksena)伯の領地として独立を失い、大陸部は遅くとも1800年頃にはフリジア語地域ではなくなっていた。東フリースラント諸島(ド. Ostfriesische Inseln)を構成する7島の最東部、ヴァンガーオーゲ島(ド. Wangerooge)の最後の話者も1950年に途絶えた。

今日のこの地の言葉は「低地ドイツ語東フリースラント方言」(ド. Ostfriesisch)であり、言語的にオランダ語フローニンゲン方言にきわめて近い。したがって、非フリジア語化という程度は(A)と(C)の両地域とも同様である。しかし、文化的伝統への思い入れは大きく異なる。東フリースラントでは12世紀に「フリジア人の自由」を守るために結成された政治組織、「ウプスタルスboom」(低地ド. Upstalsboom)を全フリジア人共通の行事として復興させるなど、かつての伝統が生きている。ただし、人々は第一にドイツ人をもって自任しており、フリジア人としての自覚はドイツ国内での地方性の意識としての性格が強い。ちなみに、この地の諸都市は中世後期に北ヨーロッパ経済を掌中に収めたハンザ同盟(ド. Hanse)とは縁が薄く、今日まで後進地域であり続けており、東フリースラントという名称につきまとうネガティブなひびきは否定できない。一方、オランダのフリースラント州と後述する北ドイツの北フリースラントは、同様に先進的イメージからはほど遠いが、東フリースラントほどマイナスなニュアンスはない。

7. ザーターラント（セールターロウンド）と東フリジア語（東フ. Seeltersk）

「東フリジア語」（ド. Saterfriesisch/Saterländisch, 東フ. Seeltersk）の使用地域は、東フリースラントの外に位置するクロペンブルク郡（ド. Landkreis Cloppenburg）の北西部を形成し、レーアから南東に30キロほど離れたザーターラント（ド. Saterland）/セールターロウンド（東フ. Seelterlound, 約123 km²、約12,000人）である。しかも、その中で、湿地帯に囲まれた砂地に沿って連なる四つの村の中の三つ、北からシュトリュクリングゲン（ド. Strücklingen）/ストルケリエ（東フ. Strukelje）、ラムスロー（ド. Ramsloh）/ローメルセ（東フ. Roomelse または Romelse）、シャレル（ド. Scharrel）/スヘデル（東フ. Schäddel または Skäddel）がその使用地域のすべてである。なお、最近では便宜的にド. Ostfriesisch/エ. East Frisian で東フリジア語を指すこともあるので、注意を要する。

ギネスブックに「ヨーロッパ最小の言語」として（誤って）登録されたこともあるというこの言語の話し手は、1100年から1400年頃の間には多くの犠牲者を出した北海からの風雨と津波の襲来で、故郷を追われた東フリジア人がテクレンブルク（ド. Tecklenburg）伯領ゼーゲル（ド. Sögel）に逃れ、当地の少数のドイツ人を言語的に同化し、定住したことを起源とする（ラ. Comitia Sygeltra, 現在の地名の由来。15世紀前半にミュンスター司教区に帰属）。宗教的にも、周囲の低地ドイツ語話者とは異なって、カトリック教徒である。19世紀までこの地は外部から地理的に隔絶されており、厳寒期に氷結した沼地を進むか、エムス川の支流であるレーダ川（ド. Leda）に南から北に複雑に蛇行しながら注ぎ、頻繁に氾濫を起こしたザーター・エムス川（ド. Sa(g)ter-Ems, 東フ. jü Äi, エ., „the River“）を船行する以外に、交通手段がなかった。1574年にミュンスターのある司教は、沼地を進んでザーターラントへ通じる唯一の道路は「生命の危険を伴い、馬車は通行不能である」と記している。また、1800年に刊行されたハルバーシュタト（ド. Halberstadt）の牧師の旅行記には、この地は「全ドイツで最悪」であり、「シベリアのステップ地帯」を連想させ、「死体の色」を連想させる荒涼とした風景の中を縫って、やっとたどり着いた小村の様子はさらに陰惨で、「神の天地創造は、この地ではまだ完結していないように見える」と記されている。もちろん、今日ではモダンな幹線道路が貫通し、バス路線も整備され、かつての印象はまったく感じない。ただし、これは第二次大戦後に旧東欧地域から移り住んだ約2千人のドイツ系移民の影響で住民の80%から50%に下降した東フリジア語話者の比率を、さらに20%弱にまで下落させることにもなった。

東フリジア語には1800年以降、3回の統計と5回の推計があり（最大3,000人）、1850年頃はザーターラントの住民の85%以上、1950年には50%の母語だった（Fort 1997 : 1787）。今日では約1,500～2,500人（約14～23%）が中高年齢層を中心に高い言語能力を有すると言われる（Fort 2001 : 410）。ただし、Sjölin (1969 : 69) と Jansma (2000 : 170) の約1,000人、Boelens et al. (1993 : 2) と Feitsma/Jappe Alberts/Sjölin (1987 :

35) の1,000~1,500人、Fort (2000 : 164) の約1,500~2,000人などの意見の相違がある。

8. 北フリースラントと北フリジア語 (北フ. Nordfriisk)

最後に言及するフリースラントは、北ドイツ、シュレースヴィヒ=ホルシュタイン州 (ド. Schleswig-Holstein) の北西部に位置する「北フリースラント郡」(ド. Kreis Nordfriesland/北フ. Nordfriislon, 約2,049km²、約16万人) である。この地へのフリジア人の移住は2回に分けて起こったとされる。第一の移住は、8世紀にスカンジナビアとの通商の過程で北海の南海岸部からヘルゴラント島 (ド. Helgoland/エ. Heligoland)/デェト・ルン島 (北フ. Deät Lun) を含む島々とアイダーシュェテト半島 (ド. Eiderstedt) に及んだ。この地には何らかの先住民がいた形跡がある。第二の移住は、11世紀にエムス川河口地域からそれまで無人の地だった大陸部の沼地に向けて行なわれた。中世の北フリジア語はアイダーシュェテト半島の南部を流れるアイダー川 (ド. Eider) からドイツとデンマークの国境をかすめるヴィーダウ川 (ド. Wiedau)/ヴィードー川 (デ. Vidå) に及んでいた。島方言は文献に残る古フリジア語以前の特徴を示しており、大陸方言は文献に残るエムス川周辺古フリジア語の特徴を継承し、北フリジア語は当初から不均質だったと考えられる (Århammar 2000 : 147)。

今日の「北フリジア語」(ド. Nordfriesisch/北フ. Nordfriisk) は、北フリースラント郡の中心都市フーズム (ド. Husum) 以北、デンマークとの国境までの海岸部と島、それにピネベルク郡 (ド. Kreis Pinneberg) に属するヘルゴラント島を使用領域とする。北フリジア語は移住時期の相違のために「大陸方言」(ド. Festlandsnordfriesisch) と「島方言」(ド. Inselnordfriesisch) に分かれるが、これは大まかな区分であり、実体は互いに意志疎通が困難なほど異なる九つの方言 (ド. Idiome) の集合体であって、地域全体を覆う標準語は現在にも過去にも存在したことがない。上記の Nordfriisk 「北フリジア語」も人工的な総称にすぎず、各方言で *frasch*, *fresk*, *Friisk*, *freesch*, *fräisch* のように異なる (Friisk は後述するセルリング方言の名称であり、ドイツ語式の名詞の大文字書きを用いる)。しかも、この地は統治者の交代とともに、中世以来のデンマーク語南ユトランド方言 (デ. *sonderjysk*/エ. *Jutish*, 後に標準デンマーク語 (デ. *rigsdansk*) が加わる)、14世紀以降の低地ドイツ語、17世紀以降の標準ドイツ語を含めた4 (ないし5) 言語が飛び交うヨーロッパ有数の多言語地域であり、ゲルマン語のるつぼという形容がふさわしい。デンマークとの国境に近い小村、ローデネース (ド. *Rodenäs*)/ロルネース (北フ. *Rornees*) とノイキルヒェン (ド. *Neukirchen*)/ナイシェスベル (北フ. *Naisjösbel*) はその典型である。

話者数については1840年の29,000人以降、11の統計があるが (中世末期は推定で最大約5万人)、1927年以降は個別地域の集積にとどまる。最新の統計は過去約20年間の統計を1988年に総括したものであり、8,965人~9,225人、周辺部と話者数の比率が著しく低い都

市部を含めると、9,000人～10,000人が中高年齢層を中心に高い言語能力を有するとされる。これは北フリースラント州の人口の6%程度、北フリジア語使用地域の人口の約15～16%に相当する（聞いて理解できるのはさらに約2万人多いとされる）。以下に **Kööp** (1991: 74ff., 154) に従って、話者数順（カッコ内は住民数との比率）に記す。(1) から (6) の六つは大陸方言（ハリゲン諸島を含むことに注意）、(7) から (9) の三つは島方言に属する（フェリング方言とエームラング方言は類似性が高く、まとめることが多い）。なお、本稿のこれ以外の箇所では、地名はドイツ語名、方言名は北フリジア語名で示す。独自の方言名がないものは、「…ハルデ方言」のように地名を方言名に転用するのが慣習である。

<大陸方言>

- (1) ベーキングハルデ (ド. **Bökingharde**)/ベーキングヒールド (北フ. **Böokinghiird**) 約 2,500人 (22%、ニービュル (ド. **Niebüll**)/ナイベル (北フ. **Naibel**) を含む)、「モーリング方言」(ド. **Mooring**/北フ. **mooring**)
- (2) ヴィーディングハルデ (ド. **Wiedingharde**)/ヴィリングヒールド(北フ. **Wiringhiird**) 約1,300人 (31%)
- (3) 北ゴースハルデ (ド. **Nordergoesharde**)/北ゴースヒールド (北フ. **Noorder Goos·hiird**) 約400人 (7%; (3) 方言のみは約280人、4.6%)
- (4) カルハルデ (ド. **Karrharde**)/コルヒールド (北フ. **Kârhiird**) 約130～180人 (3.5～4.8%)
- (5) 中部ゴースハルデ (ド. **Mittelgoesharde**)/中部ゴースヒールド (北フ. **Mädde Goos·hiird**)(ブレートシュテト (ド. **Bredstedt**)/ブレイスト (北フ. **Bräist**) を除く) 約85人 (住民の1.3%、(5) 方言のみは約20人、0.4%)
- (6) ハリゲン諸島 (ド. **Die Halligen**)/ハリエ諸島 (北フ. **e Halie**) 約60～80人 (20～23.3%)

<島方言>

- (7) フェーア島 (ド. **Föhr**)/フェール島 (北フ. **Feer**)(ヴィーク・アウフ・フェーア (ド. **Wyk auf Föhr**)/ア・ヴィク (北フ. **a Wik**) を除く) 約1,600人 (39.6%)、「フェーリング方言」(ド. **Föhring**)/「フェリング方言」(北フ. **fering**)
 アムルム島 (ド. **Amrum**)/オームラム島 (北フ. **Oomram**) 約600人 (22%)、「アムリング方言」(ド. **Amring**)/「エームラング方言」(北フ. **öömrang**)
 両者を合わせて「フェーリング・アムリング方言」(ド. **Föhring·Amring**)/「フェーリング・エームラング方言」(北フ. **fering·öömrang**)
- (8) ジュルト島 (ド. **Sylt**)/セル島 (北フ. **Söl**)(ヴェスターラント (ド. **Westerland**)/ヴェー

スターレン (北フ. Weesterlön) とリスト (ド/北フ. List) を除く) 約1,500~1,700人 (13.5~15.3%)、**「ジュルトリング方言」**(ド. Syltring)/**「セルリング方言」**(北フ. Sölring)

- (9) ヘルゴラント島 (ド. Helgoland)/デェト・ルン島 (北フ. Deät Lun, エ. „The Land“) 約800人 (32%)、**「ヘルゴラント方言」**(ド. Helgoländisch)/**「ハルンデ方言」**(北フ. Halunder)

北フリースラント郡の人口は大陸部約78%、島部約22%だが、大陸方言と島方言の話者数はほぼ同数であり、島方言の比率がかなり高い。以上の統計によれば、話者数が最大なのは (1) のベーキングハルデ方言 (通称、モーリング方言) だが、もっとも基盤が強固なのは話者数の比率の高さから (7) のフェリング方言であると言える (アメリカへの移民を考慮すれば、話者数も最大と言われる)。大陸方言と島方言の話者数はほぼ同数だが、一般に島方言の話者は大陸方言の話者よりも母語への誇りが高く、島ごとの独自の方言名によって他の方言と区別する。大陸方言ではモーリング方言だけが「ハルデ (ド. Harde)/ヒールド (北フ. hiird)」(中世デンマークの制度に由来する行政単位名) をつけた地域名「ベーキングハルデ/ベーキングヒールド」と言語名「モーリング方言」を異にする。同方言はまた、大陸方言としてもっとも有力で、そのリングワ・フランカの役割を果たしている (ただし、厳密には、モーリング方言はベーキングハルデの中核地域で用いられる方言名称にすぎない。清水 (1992)(1994) 参照)。衰退は大陸南部で激しく、南ゴースハルデ (ド. Südergoesharde)/南ゴースヒールド (北フ. Süürgooshiird) の方言は1980年頃に途絶えた。それ以前にも、かつての経済・文化の中心地、アイダーシュテト半島は17世紀、ペルヴォルム島 (ド. Pellworm) とノルトシュトラント (ド. Nordstrand, 近年の干拓以前は島) は18世紀に、それぞれすでに低地ドイツ語に移行している。

一般に少数言語の話者数の確定はきわめて困難であるが、とくに北フリジア語には西フリジア語のような近年の組織的な調査による統計がなく、Feitsma/Jappe Alberts/Sjölin (1987 : 37) の8,000~9,000人、Wilts/Fort (1996 : 2, 15) の8,000人、Walker (1996 : 3, 1997 : 3) の8,000~10,000人のように意見の相違が随所に見られる。とくに Århammar (2000 : 149) は、フェア島・アムルム島 2,250~2,500人、ジュルト島 500~700人、ヘルゴラント島 500人以下、大陸部ベーキングハルデ 1,750~2,000人、その他の大陸部 1,000人以下、総計6,000人程度 (これに北フリースラント以外で2,000~3,000人が加わる) と見積もっている。この意見では、上記の統計に反して、話者が最大の方言は島方言に属するフェリング・エムラング方言であることになる。

今日に至るまで、とまかく北フリジア語が生き残ったのは、ザーターラントと同様に、19世紀まで外界との接触がほとんどなかったことが大きい。大陸部は海とも陸ともつかな

い通行困難な沼地だった。古来、**Mandränke**「人飲み」と呼ばれる北海からの津波と洪水の脅威にさらされ続け、1362年1月にはかつてのルングホルト（ド. **Rungholt**）の30の村落が47の教会とともに海面下に沈み、1634年10月には古ノルトシュトラント島（ド. **Alt-Nordstrand**）の大部分がペルヴォルム島と現在のノルトシュトラントなど、わずかな陸地を残して引き裂かれ、9千人以上が犠牲になった。満潮時には大部分が水没するハリゲン諸島は往時を連想させる。しかし、モダンな特急列車で強固なヒンデンブルクダム（ド. **Hindenburgdamm**）を通過して、ジュルト島の高級保養地に向かうバカンス客の群れからは、かつての面影は容易には想像しがたい。北フリジア語が統一的な標準語を発達させなかったことは、政治的・経済的中心地を欠き、外部との通商ではデンマーク語南ユトランド方言や低地ドイツ語を用いたことによる。標準語の不在は、北フリジア語にとって一方的に不利だったわけではない。社会的役割分担を守り、「内輪の言語」の地位に甘んじて、他言語との競合を避けたのがその存続を支えたとも言えるからである。

9. 「フリジア語」と「フリースラント」という名称について

フリジア語とフリジア人の歴史的背景に続いて、以下ではフリジア語の現在に焦点を当てて、言語規範と言語擁護について述べる。その前に用語の使用について一言しておく。

上述のように、フリジア語の使用地域はフリースラントとは完全に一致しない。そこで、筆者は言語的（文化的）名称として「フリジア」（したがって、「フリジア語」）、地理的・行政的名称として「フリースラント」（したがって、「フリースラント州」）と呼び分けることを提唱している（清水 1993 : 288f.）。これによって、「東フリースラント」では「低地ドイツ語東フリースラント方言」が用いられ、「東フリジア語」の使用地域はその外に位置し、同様に、「西フリースラント」では「オランダ語西フリースラント方言」が用いられ、「西フリジア語」の使用地域はその外に位置することなどが明示できる。

ただし、「フリジア」の意味は言語と文化において等価ではない。北フリースラントの場合、住民の約40%に当たる約6万人がフリジア人（ド. **Friesen**）と自称し（Walker 1996 : 3, 1997 : 3）、フリジア語を用いるフリジア人（ド. **Sprachfriesen**）の6倍余りに達する。東フリースラントの低地ドイツ語話者が東フリジア人（**Ostfriesen**）と自称することも自然だが、この場合、東フリジア語の言語能力は意味をもたない。逆に、東フリジア語の話者は「ザーターラント人」を意味する **Seeltere** と自称し、「フリジア人」を意味する **Fräizen** は低地ドイツ語東フリースラント方言（**Ostfriesisch**）の話者を指す名称として回避する。

西・北・東の区分は言語学上の専門用語であり、話者の主観的な心情にかならずしも一致しない。西フリジア語の話者に重要なのはオランダ語と袂を分かつことであり、自分たちの言語は **Frysk** にすぎない。北フリジア語の話者もドイツ語やデンマーク語と一線を

画する意味で、自らの言語をたんに *fräsch/freesch/fräisch* (大陸方言), *fresk/friisk* (島方言) と呼ぶ。それどころか、大陸方言ではベーキングハルデの方言を *mooring* 「モーリング方言」と呼ぶことを除いて一般的な上記の名称も、島方言の話者には人工的な響きを伴う。自然なのは *fering* 「フェリング方言」(フェーア島)、*öomrang* 「エームラング方言」(アムルム島)、*Sölring* 「セルリング方言」(ジュルト島)、*Halunder* 「ハルンデ方言」(ヘルゴラント島) という島ごとの方言の呼称であり、各方言が独自の北フリジア語を形成しているという意識が反映されている (Nickelsen 1982 : 41ff.)。同様に、東フリジア語の話者も *Ostfriesisch* 「低地ドイツ語東フリースラント方言」との混同を避けて、自分たちの言語を *Seeltersk* と称する。以上の事実はフリジア語使用地域全体を覆う標準語の欠如による。フリジア語は単独の言語ではなく、「フリジア語群」と呼ぶのがふさわしいのである。

10. 言語規範と言語擁護

元来、北フリジア語には高地ドイツ語を基盤とする標準ドイツ語とは大きな言語的相違があった。19世紀後半以降の北フリジア語文化擁護運動 (ド. *Friesische Bewegung*) は、ドイツ寄りの北フリジア協会 (*Nordfriesischer Verein* 1902-) とデンマーク寄りのフリジア民族協会 (*Foriining for nationale Friiske* 1923-) の対立に至り (Steensen 1986)、北フリジア語の文章語の規範は両国の拮抗するナショナリズムの狭間にあって、方言単位に整備された (Riecken 2000)。たとえば、モーリング方言はデンマーク語的な *å* の文字を用い (言語学者ラスク (R. Ch. Rask) の提案による)、セルリング方言とハルンデ方言はドイツ語式の名詞の大文字書きを採用した (近年は小文字書きが普及しつつある)。

今日、大陸方言で標準語の役割を担っているモーリング方言と、島方言で有力なフェリング・エームラング方言の両者を中心に、プレートシュェトの北フリジア語文化研究所 (*Nordfriisk Instituut* 1964-) をはじめとして、多数の北フリジア語の書籍や雑誌が刊行されている (同研究所刊行の書籍は300点以上)。教育面は1970年代半ばから好転し、今日では北フリジア語地域のほぼすべての基礎学校 (ド. *Grundschule*) で選択科目として週1～2時限程度、北フリジア語の授業が設けられ (年間約1,000人前後受講、教師約25名)、基幹学校 (ド. *Hauptschule*) 3校とギムナジウム (ド. *Gymnasium*) 2校でも開講されている (Wilts/Fort 1996 : 22, Walker 1997 : 6ff.)。市民大学 (ド. *Volkshochschule*) の講習もある。また、キール大学 (*Universität Kiel* 1972-/講座化 1978-) とフレンスブルク教育大学 (*Bildungswissenschaftliche Hochschule Flensburg* 1963-/講座化 1988-) の両大学では、北フリジア語の研究と教員の育成が行なわれている。ただし、キール大学の北フリジア語辞書編集所 (*Nordfriesische Wörterbuchstelle* 1950-) は、主な方言の辞書や教材を刊行した現時点で、近年のドイツの大学をめぐる厳しい財政事情を反映して、名称としては廃止された。なお、北フリジア語諸方言の包括的辞書としては、ニセン (M. M.

Nissen 1822-1902) による膨大な未刊の原稿が眠っている (Riecken 1994)。聖書の翻訳はマルコ (1954) とマタイ (1955) の福音書のモーリング方言訳だけが刊行され、セルリング方言による新約聖書の翻訳 (19世紀半ば) は未刊である。

標準ドイツ語は最後に現われた天敵であり、北フリジア語の構造を急速に変えつつある。モーリング方言の母音組織を例に取ろう。従来の同方言には二重母音を除いて、単母音に8個の弛み母音 [ɪ][ʏ][ʊ][ə][ɛ][œ][ɔ][a] と13個の張り母音 [i:] [y:] [u:] [i:] [e:] [ø:] [o:] [e:] [œ:] [ɔ:] [a:] [ɔ:] が認定できる (清水 1994 : 466)。しかし、Århammar (1990/91 : 26ff) は教授法の立場から、若年世代に浸透している短母音7個 [ɪ][ʏ][ʊ][ɛ][œ][ɔ][a] と長母音9個 [i:] [y:] [u:] [e:] [ø:] [ɔ:] [a:] という新しい母音組織を採用するべきであるという。これは [ə] を含めれば、[ɔ] を除いて標準ドイツ語に等しく、同時に「張り/弛み」から「長/短」の対立への体系的移行を意味する。北フリジア語の言語規範は標準ドイツ語との距離をどの程度に保つかを強く意識して、再構築するべき段階に来ていると言えよう。

西フリジア語では、5. で述べたように、個々の都市部で発達したオランダ語との混成言語である都市フリジア語があるものの、比較的均質な方言分布が標準語の確立に好都合だった。しかし、オランダ語との関係は、フリースラントが1498年に独立を喪失し、1579年にユトレヒト同盟に編入され、翌年、文章語としての地位をオランダ語に奪われて以来の慢性疾患である (Vries 1993 : 182f.)。今日、西フリジア語の話者は全員オランダ語との二言語使用者だが、古くから隣接する両言語の距離は、北フリジア語と標準ドイツ語の距離以上に近い。したがって、西フリジア語の言語規範は、北フリジア語よりも強く上層言語との関係を意識し、過度にオランダ語的な要素を排除しようとする。正書法 (1980年改正) に例をとれば、たとえば、二重母音 [ei] は ij で表記するという規則がある (西フrij [neil]↔nei [nail], ド. neu↔nach)。しかし、[ei] を含む人称代名詞だけは y とつづる (hy [hei]/wy [vei]/my [meil]/sy [sei], ド. er/wir/mich, mir/sie)。閉音節で短い張り母音 [i] を表わす文字 y をこのときだけに例外的に用いる理由は、同じく [ei] を含み、使用頻度の高いオランダ語の対応語 hij [hei]/wij [veij]/ mij [meil]/zij [zeil] との距離を保つためである。この y [i] による例外的な [ei] の表記は、[i:] > [ei], [ei] > [ai] という音韻変化以前の古形を保つ東部のヴォーデン(森林) 地方 (Wâlden) のヴォーデン方言 (Wâldfrysk) による。しかし、標準西フリジア語の規範は、西部のクライー(粘土層) 地方 (Klaai) のクライー方言 (Klaaifrysk) に依拠するのが原則のはずである。別の例として、同じく使用頻度の高いド. haben の標準的語形は hawwe である。ところが、Hof (1933 : 70) の方言調査によれば、北西部 hewwe/南西部 hebbe/北東部 hawwe/南東部 habbe であり、これもオランダ語の hebben から距離を保つための人工的な選択である。hawwe は ik ha(w) west (エ. I have been) のように、wêze (ド. sein/オ. zijn) を支配する完了の助動詞とされるが、これもオランダ語的な zijn-支配 (ik ben geweest, ド. ich bin gewesen) の回避

であり、話者の多くには *ik bin west* (ド. *ich bin gewesen*) は違和感がない。規範からはずれた「オランダ語臭い」とされる表現こそ、じつは若年世代には身近な場合が少なくない。人工的産物と映りがちな西フリジア語の言語規範の課題は、現実との関係をどう保つかにあると言える (Breuker 1993)。

学校教育ではフリースラント州のすべての小学校 (初等学校 1980-) とその上の中等学校 (1993-) で西フリジア語の授業が義務化され (実施内容は大きく異なる)、フリジア語教育委員会 (AFUK, *Algemiene Fryske Underrjocht Kommisje* 1928-) の教材や講習も豊富にある。大規模な研究機関であるリャウエト (西フ. *Ljouwert*) /レーヴァルデン (オ. *Leeuwarden*) のフリスケ・アカデミー (*Fryske Akademy* 1938- 研究員約40名) は800冊以上の出版物を刊行し、1984年以来、西フリジア語辞典 *Wurdboek fan de Fryske taal/ Woordenboek der Friese taal* (全25巻) を編集している。フローニンゲン (*Rijksuniversiteit Groningen* 1930/講座化 1941-) とアムステルダム (*Universiteit van Amsterdam* 1949/講座化 1955-) の両大学でも主専攻が可能である。レイデン大学 (*Rijksuniversiteit Leiden*) でもフリジア語学の選択が可能である。西フリジア語書籍の出版は年間約100冊を数え、聖書の翻訳の刊行は新約聖書が1933年、全訳が1943年であり、全訳については1978年に新訳が出版された。

東フリジア語の文章語の規範は未確立で、正書法もフォート (M. C. Fort) とクラメル (P. Kramer) の両研究者で異なる。学校でも初等教育では細々と教えられているが、教材はほとんどない。ラムスロー村の市民大学では小規模な講習がある。オルデンブルク大学 (*Universität Oldenburg*) には低地ドイツ語・東フリジア語研究施設 (*Arbeitsstelle Niederdeutsch und Saterfriesisch*) があつたが、肌の黒いアメリカ人で、上記の施設長を勤めたフォート博士が2003年に退官した後は、後任は補充されておらず、公的な研究教育機関は事実上、もはや存在していない。ニーダーザクセン州 (ド. *Niedersachsen*) の基本法での保護規定を欠く東フリジア語の言語擁護は、今後、郷土愛と個人的関心のレベルで支えられていく以外にない状況に置かれている。なお、*„Jahrbuch für das Oldenburger Münsterland“* などの雑誌には東フリジア語のテキストが少数掲載され、稀に東フリジア語による書籍も出版される。2000年には新約聖書の全訳がフォート博士の努力で世に出た。

11. 言語としての地位と未来

北フリジア語にとって、デンマーク語南ユトランド方言の圧迫を受けた時代はなく、最初の脅威は低地ドイツ語だった。標準ドイツ語としての高地ドイツ語は1867年のプロイセン編入以降、影響力を増し、第二次大戦以降、圧倒的優位に立った。今日、北フリジア語話者のすべてがこれを習得し、標準ドイツ語は北フリジア語全域を覆っている。1990年8月1日以降、シュレースヴィヒ=ホルシュタイン州の基本法 (ド. *Verfassung des Landes*

Schleswig-Holstein) には「デンマーク系少数民族国民」(ド. nationale dänische Minderheit) と並んで、「フリジア人民族集団」(ド. friesische Volksgruppe) にたいして保護と振興を要求する権利を認める規定が盛り込まれている。しかし、北フリジア語はドイツの公用語ではなく、行政文書や裁判でも認められていない。新聞では月 1 回の小規模な記事、ラジオでは週 1 回数分間の放送に限られ、テレビ番組はない。1997年に認可されたドイツ語との二言語表記の地名標識も、整備途上の段階にある。1975年にコペンハーゲン大学の調査団がローデネース村(住民約500人)で行なったアンケートによると、北フリジア語の習得率は40歳代で49.2%だが、30歳代22.9%、20歳代13.3%、10歳代3.8%、10歳未満で0%に至る(Spenter 1977: 175)。当時すでに、20歳未満では低地ドイツ語、デンマーク語南ユトランド方言、標準デンマーク語の習得率は一律に6%に満たず、同村の多言語使用の継承は明らかに困難である。北フリジア語の高密度の共同体は、フェーア島西部(ド. Westerland-Föhr/北フ. Waasterlun Feer) とベーキングハルデのリーズム・リントホルム(ド. Risum-Lindholm/北フ. Risem-Loonham) にほぼ限られており(Sjölin 1997: 1778, Århammar 2000: 144)、他の地域では存続が危ぶまれる。

東フリジア語は第二次大戦まではザーターラントで支配的な言語であり、低地ドイツ語よりもつねに優位に立ってきた。しかし、戦後の移民と交通の整備で標準ドイツ語が勢力を急増した。今日、話者は中高年齢層を中心とし、ほぼ全員が標準ドイツ語と低地ドイツ語の三言語使用者だが、若年齢層は標準ドイツ語だけを母語とする傾向が強い。社会的有効性は地域内の伝統的職業で低地ドイツ語と拮抗するだけであり、存続が強く懸念される。

北・東フリジア語は独立の「言語」としての性格を問われることがある。たとえば、Goossens (1977: 49f.) は、言語の認定基準は歴史的親縁関係(ド. Verwandtschaft) と社会的優位性(ド. Überdachung) にあるが、北・東フリジア語はどちらの基準からもはずれ、フリジア語全体の標準語もないために、両者をドイツ語の方言とする意見を述べている。たしかに、ヨーロッパでは方言にたいする「言語」の認定は社会言語学的基準によることが多いが、北・東フリジア語の衰微は同言語の話者の世代的減少であっても、ドイツ語の方言への転換を意味しない。北・東フリジア語はドイツ語と相互理解が不可能なほど隔たり、ドイツ語の方言だった時代はなく、話者にドイツ語の方言という意識もない(Walker 1983)。さらに、かつての東フリジア語としての Ostfriesisch には、6. で述べたように、20世紀初頭まで東フリースラント諸島東端のヴァンガーオーゲ島に最後の話者がいた。この話者の東フリジア語は当然、社会的役割をもたなかったわけであり、したがって、低地ドイツ語方言だったことになってしまい、明らかに矛盾に陥る。Goossens (1977: 49f.) の意見は、ヨーロッパという特殊な言語環境で過度に理想化された社会言語学的見地からの偏見であるように思われる。

一方、西フリジア語はオランダの地域的公用語であり、行政文書にも使用可能で、必要

に応じてオランダ語に翻訳することが1995年に最終的に公認された。裁判でも認められ、西フリジア語の公的書簡には原則として西フリジア語で返答するという法律規定がある。1989年に認可されたオランダ語との二言語表記の地名標識も多い。フリースラント放送局（Omróp Fryslân）は毎週70時間以上、西フリジア語のラジオ放送を行ない、テレビ番組も作成している。州の二つの新聞でも5%程度、西フリジア語の記事が掲載される。ヨーロッパ評議会（ド. Europarat）によるヨーロッパ地域・少数言語憲章（ド. Europäische Charta für Regional- und Minderheitensprachen）はオランダでは1998年に施行され、西フリジア語の社会的地位は格段に高まっているという印象を受ける。

ただし、言語能力の向上と話者数の増加はそれで保証されるとは限らない。西フリジア語は公用語といっても地域的に限定され、実践度も高くない。Gorter/Jonkman (1995)によれば、西フリジア語の話者数は1980年の調査から変わっておらず、書く能力は学校教育の充実で10%から17%に向上したという。しかし、これは話者の自己申告に基づき、実際の生徒の書く能力ははるかに低いという学校教育からの報告もある。言語擁護には政策上の人為的性格が付随しており、ナイーブな幻想を喚起しやすい。社会言語学的基準の偏重は政治的認識に傾きやすく、言語学的現実とは別に求めるべき場合がある（De Haan 1996）。

フリジア人の存在は第一にフリジア語とともにある。個性的な伝統工芸、民族衣装、年中行事もフリジア語という言語の持つ力からはほど遠い。今日のフリジア人はオランダやドイツの地方のいくつかと同様に、牧歌的ないわゆる「田舎」の住民ではあっても、社会的政治的に差別冷遇される「異民族」ではない。祖先の土地や生業の利権を奪われて法的に争うこともなく、「ときにオランダからの独立が叫ばれたりもする」（司馬遼太郎『オランダ紀行』朝日文芸文庫、45ページ）こともない。とくに西フリジア語の擁護には正規の公的機関があり、研究教育出版事業を積極的に行なっている。マスコミや学校教育でも一定の配慮がなされている。とくに西フリジア語の言語政策は、ヨーロッパの少数言語の模範とも言えよう。それだけに、その言語の保持は第一に話者自身の意識にかかっている。第二次大戦までに幼児期を過ごした話者は就学以前、フリジア語だけで育ち、オランダ語や標準ドイツ語はほとんど耳にしたことがなかった。オランダ語や標準ドイツ語は学校教育で初めて学ぶ言語だったのである。今日、両親の中にはオランダ語や標準ドイツ語の能力の遅れを恐れて、子供にフリジア語を伝えない場合が少なくない。

しかし、一般にドイツ、オランダには地方文化の伝統にたいする住民の強い誇りと愛着が生きている。フリジア語という無形の精神文化を自己のアイデンティティとしてプラスに還元する努力が実を結べば、古来のフリジア人の言語文化は保持される可能性がある。フリジア語研究における近年の国際化の努力も著しい。両国の国民性にも顕著な「自己主張」が「他者理解」に結びつけば、フリジア語の存在は新しい統合ヨーロッパの言語文化的多様性の意義をいっそう高めることに貢献するだろう。

[参考文献]

- Århammar, N. 1990/91. „Didaktische Aspekte der jüngsten Vereinfachung des Mooringer Vokalsystems“. In: *Nordfriesisches Jahrbuch* 26/27. 23–33.
- Århammar, N. 2000. „Nordfriesisch“. In: Wirrer (Hrsg.). 144–158.
- Boelens, K. et al. 1993. *De Fryske taal*. Ljouwert. AFUK.
- Breuker, P. 1993. *Noarmaspekten fan it hjoeddeiske Frysk. Estrikken* 70.
- De Haan, G. J. 1996. „Over de (in-)stabiliteit van het Fries“. *Nederlandse taalkunde* 96–4. 306–319.
- Feitsma, A./Jappe Alberts, W./Sjölin, Bo. 1987. *Die Friesen und ihre Sprache. Nachbarn* 32. Bonn. Presse- und Kulturabteilung der Kgl. Niederländischen Botschaft.
- Fort, M. C. 1997. „Deutsch – Nordfriesisch“. In: *HSK* 12. 1786–1790.
- Fort, M. 2000. „Saterfriesisch“. In: Wirrer (Hrsg.). 159–169.
- Goossens, J. 1977. *Deutsche Dialektologie*. Berlin/New York. de Gruyter
- Gorter, D. 1997. „Dutch – West Frisian“. In: *HSK* 12. 1152–1157.
- Gorter, D./Jelsma, G. H./Van der Plank, P. H./De Vos, K. 1984. *Taal yn Fryslân*. Ljouwert. Fryske Akademy. (英語版要約 1988. *Language in Friesland*.)
- Gorter, D./Jansma, L. G./Jelsma, G. H. 1990. *De taal op it Grinsgebiet*. Ljouwert. Fryske Akademy.
- Gorter, D./Jonkman, R. J. 1995. *Taal yn Fryslân op 'e nij besjoen*. Ljouwert. Fryske Akademy.
- Hof, J. J. 1933. *Friesche dialectgeographie*. 's-Gravenhage. Nijhoff.
- HSK* 12. (Hrsg. Boebl, H.). 1997. *Kontaktlinguistik*. Berlin/New York. de Gruyter.
- Jansma, L. G. 2000. „Friesisch im westerlauwersschen Friesland“. In: Wirrer (Hrsg.). 170–185.
- Jansma, L. G./Jelsma, G. H. 1996. *Friezen om utens*. Ljouwert. Fryske Akademy.
- Kööp, K. P. 1991. *Sprachentwicklung und Sprachsituation in der Nordergoesharde*. Bräist/Bredstedt. Nordfriisk Instituut.
- Munske, H. H. (Hrsg.) 2001. *Handbuch des Friesischen/Handbook of Frisian Studies*. Tübingen. Niemeyer.
- Nickelsen, H. Ch. 1982. *Das Sprachbewußtsein der Nordfriesen in der Zeit vom 16. bis ins 19. Jahrhundert*. Bräist/Bredstedt. Nordfriisk Instituut.
- Riecken, C. 1994. *Wörterbuch im Dornröschenschlaf. Zur Entstehung und Anlage des „Nordfriesischen Wörterbuchs“ von Moritz Momme Nissen*. CO-FRISICA XV.
- Riecken, C. 2000. *Nordfriesische Sprachforschung im 19. Jahrhundert*. Bräist/Bredstedt.

Nordfriisk Instituut.

- 清水 誠. 1992. 「北フリジア語モーリング方言 (1). 文法－V. *Tams Jørgensen: Kort språkeleir foon dāt mooringer frasch* 訳注」『北海道大学文学部紀要40-3』. 65-162.
- 清水 誠. 1993. 「言語接触とゲルマン語の類型－フリジア語群を中心に (1)」『独語独文学科研究年報第20号』(北海道大学ドイツ語学文学研究会). 283-299.
- 清水 誠. 1994. 「北フリジア語モーリング方言の音韻」『ドイツ語学研究2』クロノス. 445-503.
- 清水 誠. 2000. 「フリジア語群の三つの生態と多言語使用」『ドイツ文学108号』(日本独文学会). 45-58.
- 清水 誠. 2003. 『西フリジア語文法－現代北海ゲルマン語の体系的構造記述とゲルマン語類論構築のための基礎的研究－』(博士論文 北海道大学)
- Sjölin, B. 1969. *Einführung in das Friesische*. Stuttgart. Metzler.
- Sjölin, B. 1997. „Deutsch－Nordfriesisch“. In: *HSK 12*. 1777-1782.
- Spenter, A. 1977. „Zur Mehrsprachigkeit in der Gemeinde Rodenäs“. *Nordfriesisches Jahrbuch* 13. 167-177.
- Steensen, Th. 1986. *Die friesische Bewegung in Nordfriesland im 19. und 20. Jahrhundert (1879-1945)*. Neumünster. Wachholtz.
- Steensen, Th. 1994. *The Frisians in Schleswig-Holstein*. Bräist/Bredstedt. Nordfriisk Instituut.
- Vries, O. 1993. 'Naar ploeg en koestal vluchtte Uw taal': *De verdringing van het Fries als schrijftaal door het Nederlands (tot 1580)*. Ljouwert. Fryske Akademy.
- Walker, A. 1983. „Nordfriesisch－Ein deutscher Dialekt?“. *ZDL* 50. 145-160.
- Walker, A. G. H. 1990. „Frisian“. In: Russ, Ch. V. J. (ed.). *The dialects of modern German*. London. Routledge. 1-30.
- Walker, A. 1996. „Nordfriesland, die Nordfriesen und das Nordfriesische“. In: Hinderling, R./Eichinger, L. M. (Hrsg.). *Handbuch der mitteleuropäischen Sprachminderheiten*. Tübingen. Narr. 1-30.
- Walker, A. 1997. North Frisian. *The North Frisian language in education in Germany*. Ljouwert/Leeuwarden. Mercator-Education.
- Wilts, O./Fort, M. C. 1996. *Nordfriesland und Saterland. Friesisch zwischen Meer und Moor*. Brüssel. Brüsseler Informationszentrum. Europäisches Büro für Sprachminderheiten.
- Wirrer, J. (Hrsg.) 2000. *Minderheiten- und Regionalsprachen in Europa*. Wiesbaden. Westdeutscher Verlag.

(北海道大学大学院文学研究科 教授)